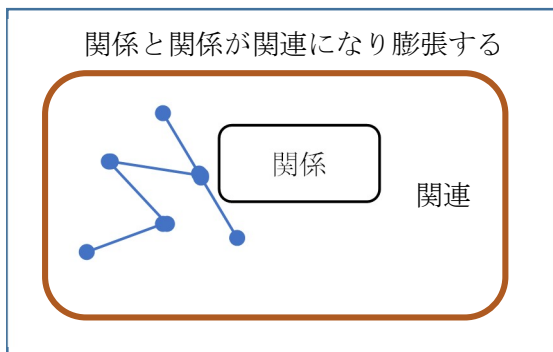


第2章 生きているということ

関係（事柄の関連）が関連を作り、膨張する。そして、関連の中で、関連を維持しようとする関係の力が、内を作り出す。内ができるということは、個ができることにつながる。



そして外側の関連性の変化を、個が対応することを認識すると言う。認識することを生きるという。

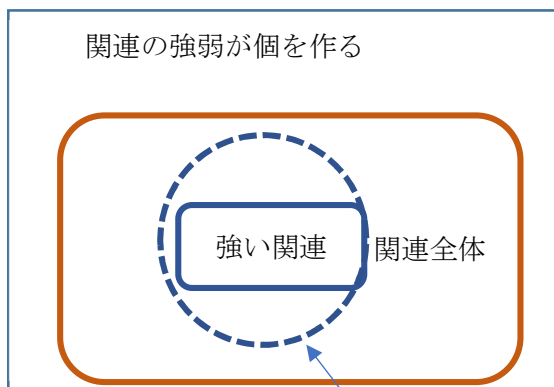
そして、個を維持しようとする認識が、常に上回る時、生きているという。

個があり、生きる（認識する）活動をし、個を維持している。個が生きている。

認識は、外に対する対応である。生きるという活動そのものである。個維持し認識の活動をしている個を、生きていると言う。

第2章1項 事柄の関連と内側

関係（事柄の関連）と関係（事柄の関連）が、関連を作り出す。関連は、場所、時間、偶然により変化する。関連は、事柄より、より多く変化する。



維持させようとする力が
個を生み出す

その変化の中で、関連を維持し、安定させる力が、内側を作り出す。関係で言えば、関係を強化して、維持と安定を作り出す力で、感を生み出した力にあたる。

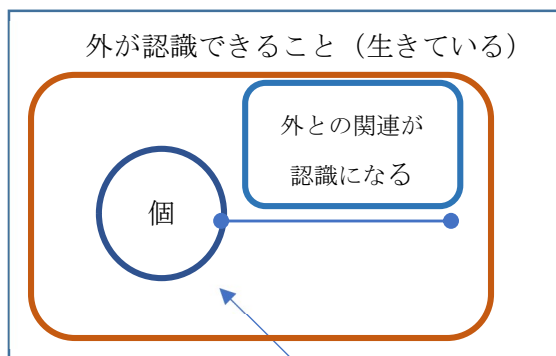
この力は、混沌の均一を壊す力にあたるので、個を生み出し、維持させる力になる。

感を生み出す力は、混沌に関係を作り出す、そして関係に働けば、関係を強化し、安定化する。

第2章2項 関連から認識、生きる

個ができ、個を維持安定する力が、変化する力より強く働く間は、外側との関係や関連の変化に対応して、個を維持しように対応する。この対応を、外を認識するという。

認識は、外の変化に対応して、個を維持させる為の対応であり、この活動が生きてある。



個の内部で、対応するかしないか、どう対応するかが決まる。

対応する場合、外部及び内部に向けて対応する。

この認識を、生きるということを基本とする、関連の中に生まれた活動である。

個を維持する力が、強い時は、内側を作る
関連が、認識になる

第2章2項補足 生きるための対応と、生きないための対応

死への対応をどのように扱うか問題になると思う。

最初の認識は、基本的に生きる為の対応である。その後に死の、対応も現れる。

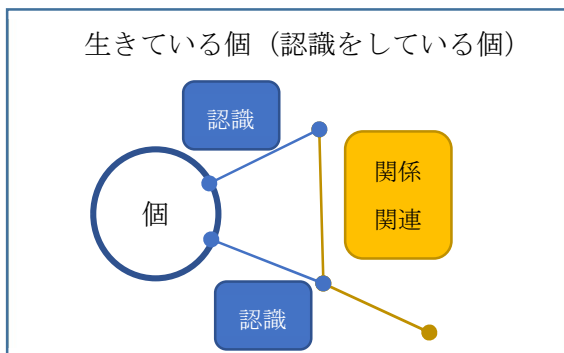
あくまで死への活動は、生きる為の認識が、成立した後である。

生きるが成立して、生きているから死の対応がある。その意味で、対応ではマイナスにはなる。しかし全体的には、マイナスにはならず、時間の関連性の中で、生きるは、特定の関係と関連の時間中で、存在する。基本的に、認識と生きるは、つながっているのである。

第2章3項 生きる、生きている

生きるは、ある一つの関係としてとらえると、生きているは、それが時間的に連続している認識の関連にあたる。

個があり、生きている。常に認識の活動をしている、その特定の認識の関連を、個が生きていると呼ぶ。



個が成立し生きている活動が始まると、外の対応に対して、対応しない事も認識の一つの対応になる。

生きている個にとっての認識とは、対応するかどうかは関係なく、外側の変化を、感知する活動に変化する。(生きるに対する認識と、生きている個に対する認識とでは、認識の意味が変わる)

第2章3項補足 個の増殖、物性との関係

一般的に生物というと、増殖することになっている。しかし増殖は、個の維持を行った結果である。

個を、維持するために、遺伝子があり増殖する。遺伝子は、生物の維持にも使われる。増殖しなくなっても、死を意味しない、増殖しなくても維持ができれば、基本的に生きている。死は、生きる活動が止まった時である。

また、一つの生きている個は、一つの物的単位を、必ずしも意味しない。

生きている個を、物質的にとらえるのには、無理がある。地球上でも多細胞生物は、各細胞の生死と、多細胞生物の生死とは、完全には一致しない。また地球上の多胞生物でも単細胞生物に変化する生物いる。その生物を個体は、常に変化している。多細胞生物の一つの細胞を、生物の個として、扱うかなど問題が多い。地球上では、生物に物質的単位があるので、生物と一つの生きている個を同一視できる。しかし基本的には、生きている個を物質的には、定義できない。